

高齢者虐待事例におけるアセスメント

—なぜ高齢者虐待が起こるのか—

山口 光 治*

I 研究背景と目的

1. 本研究の背景

高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（以下「高齢者虐待防止法」という。）が施行されて10年が経とうとしている。平成18年度、18,390件であった養護者による高齢者虐待の相談・通報対応件数は、平成25年度には25,310件に増加している。また、事実確認調査の結果、市町村が「虐待を受けた又は受けたと思われると判断した事例」（以下「虐待判断事例」という。）は、12,569件から15,731件に増えてきている¹⁾。また、平成25年度の調査結果をみると、養護者²⁾による虐待の虐待判断事例のうち7,058人（34.3%）の事例で被虐待高齢者を保護するために虐待者との分離を行い、そのうち、介護保険サービスの利用が2,654人（37.6%）で最も多く、医療機関への一時入院が1,203人（17.0%）であった。分離していない事例では、養護者に対する助言・指導が5,712件（51.5%）、ケアプランの見直しが3,264件（29.4%）であった。

家庭という密室の中で、養護者と高齢者の間で、どのように虐待が生じ、それに対してどう対処していけばよいのであろうか。人間は関係のなかで生きているといわれる。別の言い方をすると、「関係を生きる人間」として虐待を受けている高齢者（以下、「被虐待高齢者」という。）、虐待をしている養護者（以下、「虐待者」という。）をとらえることができる。被虐待高齢者は、虐待者（家族）との関係のなかで生きているし、虐待者も被虐待高齢者との関係を生きているといえる。そこで、高齢者虐待が発生している事例を、あらためて虐待者と被虐待者の関係性に焦点をあて、なぜ虐待が起こるのか、家族機能のなかで虐待者がどのような影響を与え、それによって被虐待高齢者はどのような影響を受け、どんな日常生活を送っているのかを見つめ、先行研究の理論的枠組みを用いて分析し直し、虐待の発生要因から対応方法へと検討を試みていく。本研究は平成26年度科学研究費助成事業（学術研究助成

*総合福祉学部 教授

基金助成金）基盤研究（C）、研究課題名：「在宅高齢者虐待の虐待者と被虐待者の関係性に焦点をあてた介入実践モデルに関する研究」（26380768）として、取り組むものである。本稿はその途中経過の一部である。

2. 先行研究の概観

養護者による高齢者虐待への対応に関しては、高齢者虐待防止法が制定されてから大渕（2008）監修による『高齢者虐待対応・権利擁護実践ハンドブック』や日本社会福祉士会（2011）による『市町村・地域包括支援センター・都道府県のための養護者による高齢者虐待対応の手引き』などが作成され、虐待対応の中心となる市区町村や地域包括支援センターで用いられている。これらには、虐待の通報・相談から終結までの高齢者の安全確保を主にした「虐待対応」が示されているものの、虐待者である養護者に対する具体的な支援方法や対応方法についてはあまり記されていない。また、副田ら（2013）は近年、「安心づくり安全探しアプローチ（AAA）」を開発し、遅れている高齢者虐待の介入アプローチ開発に一石を投じている。これは一つの実践モデルの提案であり注目に値し、今後、複雑な高齢者虐待事例への対応において、その効果の検証が必要となろう。

養護者による高齢者虐待の発生要因や誘因に関しての先行研究をみると、上田ら（1998：437-447）は、第一に高齢者側の要因として、心身の状況が要介護であることが虐待発生に何らかの影響を及ぼしていること、性格が頑固、強引であり自己中心的であること、過去の経歴で加害者との人間関係に問題があった点などをあげている。第二に、虐待者側の要因として介護負担や健康状態、それによるストレスが影響していること、介護知識や技術、介護意識の欠如、自己中心的な性格、就労や育児などのために十分な介護ができないなどをあげている。第三には、高齢者と虐待者間や家族内の問題に起因したものとして、高齢者と虐待者が過去から関係が悪かったり、家族内に病人がいたり借金があったりなどの家族問題の存在も指摘している。さらに第四に、社会的要因としてはサービス利用に費用がかかること、保健や福祉制度の利用を拒んだり、他にも家族がいるのになぜ自分が介護をしなければならないのかななどをあげている。そして、これらの要因は単一で生じるものではなく、多くの要因が複雑に関与して虐待へ至ることを指摘している。

各種調査や先行研究を踏まえると、以下のような要因に整理できる³⁾。

①家族介護者の介護疲れ・介護ストレス：身体的、情緒的ケアを求めて依存している高齢者は、介護者のストレス源となりうる。特に認知症で問題行動を伴い、認知障がいやADLが低下している高齢者への介護、介護者と高齢者の感情の歴史、過去の争いごとなどの関係性から怒りや憤りが再燃することもある。②要介護高齢者の障がい・認知症の症状：高齢者は身体的にも精神的にも機能低下によって虐待の被害者になりやすい。③暴力の循環：家庭

内暴力が、家庭の中で学習され、一世代から次へ移ることも指摘されている。④虐待者個人が抱える問題（障がい・疾病など）：虐待者のなかには、アルコール依存などの嗜癖、精神疾患、経済的問題などを抱えている場合がある。⑤家族関係の不和：介護者と高齢者の人間関係、特に感情面の歴史、過去の争いごとなどの家族の関係性の不和が影響していることも各種調査から指摘されている。

また、高齢者虐待が発生している事例を、あらためて虐待者と被虐待者の関係性に焦点をあてて分析する際に参考となるものが、家庭内暴力の理解に用いられる「権力（power）」と「支配（control）」の視点⁴⁾である。この「ドゥルース・モデル」では、「権力と支配の車輪」が用いられ、分析が行われている。そして、加害者への教育プログラムの実施を通して「権力と支配の車輪」から「平等の車輪」へと理解を促し、暴力をふるっていた側の変化を働きかけていく。このモデルは主として夫婦や恋人などの男女間の暴力を対象とし、加害男性の教育プログラムを提示し、わが国でも用いられている。しかし、夫婦間だけでなく親子間において発生する高齢者虐待の事例においても、この家庭内暴力の分析理論と介入方法は活用可能であると考えている。その根拠は、米国の晩年の虐待に関する国家情報センター：NCALL（National Clearinghouse on Abuse in Later Life）において、この理論が用いられ研修等に活用されているからである⁵⁾。

3. 本研究の目的

本研究は、前述した科学研究費助成事業の目的である、養護者による高齢者虐待が発生している家庭内の、虐待者と被虐待高齢者との関係性を、家庭内暴力を理解する際に用いられている「権力」と「支配」の視点からとらえ直し、虐待が発生する構造と要因、その影響をタイプ別に分類・整理するため、その一環として行われた事例検討から高齢者虐待事例の「アセスメント局面」における支援者側の支援課題を明らかにすることを目的としている。ここでいう「アセスメント局面」とは、発生している虐待に関する情報を収集する過程と、その問題点（生活課題）を明確にする過程を意味して使用している。

Ⅱ 研究方法

1. 研究方法の選択

本研究では帰納的アプローチによる質的研究法を選択した。Uwe Flick（=2011：17）は「人と状況に結びつきのある主張を、実証的に根拠のある形で生み出すことを、質的研究は目指すのである」としている。そして、実証研究のステップを事例の収集と解釈を繰り返しながら比較をするなど、循環的に組み合わせる「研究プロセスの循環的モデル」を提唱している（Uwe Flick = 2011：110-114）。それゆえ、高齢者虐待の事例収集と解釈・分析という

探索的研究には、実践領域からの質的研究が適していると考えられる。そこで、現実において起こっている現象を明らかにするため本研究方法を用いた。

2. 事例収集の対象

高齢者虐待事例を収集するにあたり、対象地は本研究への協力依頼に同意が得られた首都圏の3自治体とした。そして、事例提供者ならびに事例検討会参加者として、①3自治体内にある地域包括支援センターの社会福祉士とその自治体の高齢者虐待防止担当部門に所属している職員であること、②高齢者虐待の事案に直接的にかかわり、その防止のために被虐待高齢者や虐待者に接する実践経験を有していることの2つの条件を満たした専門職とした。その結果、3自治体合計6名の専門職から協力を得ることができた。

3. 事例報告の内容と検討会の実施

3自治体から9つの高齢者虐待事例の提供をいただき、3回の事例検討会において詳細な内容を報告していただいた。1回の検討会で3事例を取り上げ、検討会には研究協力者として3自治体の行政職員と地域包括支援センター社会福祉士の6名、学識経験者（大学教員等）3名、さらに臨床心理士1名の助言も得ながら事例の整理を試みた。

事例報告にあたり、事例提供者には事前にフォーマットを送付し、現在起きている虐待の状況、被虐待高齢者・虐待者・家族の状況、家族関係の歴史、生活状況や生活環境、虐待が起きた原因などの整理を依頼した。取り上げた事例は、①当該自治体が高齢者虐待と判断している事例であり、②被虐待高齢者と虐待者に関して具体的にかかわり、ある程度の情報を得られる事例とした。

事例検討は2015年6月から2015年10月の間に、研究協力者と日程を調整のうえ3回実施した。

4. 倫理的配慮

虐待事例の収集にあたっては、目的に合致した必要最小限の個人情報に限定し、調査目的とデータの使用目的を十分に説明したうえで、当該自治体、ならびに地域包括支援センターの同意を得て実施した。また、事例の収集、検討に際して、データの管理は十分な秘密保持の配慮を行い、個人が特定されないようにした。本調査に関しては淑徳大学研究倫理審査委員会の承認（申請番号2014-101）を得て実施した。

5. 事例検討での焦点

事例検討は、先に述べた、現在起きている虐待の状況、被虐待高齢者・虐待者・家族の状況、家族関係の歴史、生活状況や生活環境、虐待が起きた原因と考えられることなどを提供

者から報告し、虐待者の権力と支配の視点からとらえ直し、なぜ高齢者虐待が起こるのかについて討議を通して焦点化するように進めた。その際には、特に、虐待は虐待者が虐待行為を振るわなければ発生しないことを念頭に置き、虐待をしている養護者に焦点をあてた。

Ⅲ 事例検討の結果

高齢者虐待と判断した9事例を検討し、「概要」と「虐待者に焦点をあてた事例分析」の結果を以下の通り簡略化して整理した。

報告された事例に関する情報は、虐待原因の本質や分析の焦点が損なわれない範囲において、特定の事例として判別できないように省略もしくは改変した。また、事例検討では、虐待への対応方法に関心が強く寄せられ議論になったが、本研究の目的に照らし、なぜ虐待が起こるのか、なぜ虐待者が虐待を行うかに焦点化して整理した。

事例1. 息子による母親への身体的虐待と不適切な介護

(1) 概 要

母親は80歳代。同年代の夫と40歳代の息子との3人暮らし。母親は要介護4でADLがほぼ全介助の状態である。また、発語がほとんどなく、夫や息子の言動にあまり反応はない。夫は妻に対して命令口調で話す。息子は力づくで無理やり歩行をさせるなど無茶な介護をし、母親が言うとおりに行動できないと口調が強くなる。介護サービスに対する過剰な期待があり、要求が増えている。息子は母親の心身の衰えを受け入れられないようで、歩行や食事、排泄などが出来なくなることを恐れている。

(2) 虐待者に焦点をあてた事例分析

若いころから、母親は夫から暴力を受けていたようである。その中で育った息子との、もともとの親子関係はどうであったか。母親と息子、父親と息子の関係性はどうかであったか。母親との距離と父親との距離は全く違うようにみえる。息子が小さい時からどうだったのか、情報が必要となる。夫、息子共に妻（母親）の老いが受け入れられない背景には、それぞれ、妻の変化、母の変化を受け入れられない心理が働いているように思われる。息子は「母はこうしたいと思っているから、こうする」と考え、母親と自分が一体のように認識しているのではないか。母親も一人の人格があるという認識がないようにみえる。もし夫から妻への暴力が日常的にあったのだとすれば、母が息子を守ると同時に、息子も母を守る役割をもち続けていたことも考えられる。

事例2. 息子による父親への暴力

（1）概 要

父親は70歳代。同年代の妻と生活していたが、数年前に40歳代の息子が自宅に戻り、同居することになった。ある日、息子が飲酒して暴れ、自宅の家具や窓ガラスを破壊し、母親の通報により警察が介入する。暴れた際に父親は打撲傷を負った。

（2）虐待者に焦点をあてた事例分析

父親の父（祖父）は、非常に厳格な人で、スパルタ式に教育してきた。そして、そのように育てられた父親は息子に対してもスパルタ式に育ててきたとのことであった。息子には、小・中学生時代にずっとスポーツをやらせていた。しかし、次第に息子は家庭内で暴力を振るい、両親に金を無心するようになる。また、他校の生徒とけんかをするようになった。その後、高校を中退し行方不明となる。ある日突然戻ってきては金を無心していた。息子と両親、兄弟の関係性から、厳格な父親、その父からの過剰なスポーツへの期待、過保護な母親など、その現実から逃げる不適応が起きている（機能不全家族）と考えられる。

事例3. 息子による母親への経済的虐待と世話の放棄

（1）概 要

80歳代の認知症の母親と50歳代の息子との二人暮らし。生活保護世帯。息子が金銭管理をしているが、住宅の家賃や介護サービスの利用料の滞納、使い込んで母親の食事も確保できないこともある。母親のおむつ交換や食事の介助など、十分な介護ができていない。

（2）虐待者に焦点をあてた事例分析

息子は一方的に自分の話ばかりし、会話が成り立たない。思い通りにならないと激高しやすく、関係者に怒鳴り、物に当たるなどの態度を示す。自分の意向に反することを言う人に対しては、拒絶してしまう。就労への支援を行うが、何かと理由をつけて就労に至らない。息子に関する情報から、知的な障がいや発達の障がい疑われる。息子が一人で生活していくことができない状況は、母親がかばい続けていたからかもしれない。母親の認知症が明らかになって、息子の知的な問題が表面化してきたように見受けられる。

事例4. 息子による認知症の母親への世話の放棄

（1）概 要

70歳代で認知症があり、要介護2の母親と一人息子の同居世帯。認知症の進行に伴い医療機関受診が増えたこと、介護サービスが必要な状況になったが、母親は無年金であり、世帯として経済的に余裕がなく、十分な医療・介護を受けることができない状況。

(2) 虐待者に焦点をあてた事例分析

息子は自営業であるが経済的に厳しく、「お金のかかることは嫌だ」と言う。息子の悩みは、「お金のやりくり」。離婚した子どもの養育費、自営業の維持費、住宅ローンのことで「頭がいっぱいだ」と話す。

息子の事務手続き能力、自営業の仕事内容などを見るとソーシャルスキルの低さが疑われる。また、母親に対する言葉の端々に、「もう死んでいるかと思った」などと早く死んでくれることを待ち望んでいるような印象を受けた。今の状況が息子の生活能力、例えば経済力、思考能力などを超えてしまい、認知症が進む母への対応が出来なくなっているのではないか。また、息子の離婚や養育費の負担。住宅ローンの支払いなども足かせになり、自身の今後の生活に対する不安もある。

事例5. 息子による母親への身体的虐待と世話の放棄

(1) 概 要

30歳代の息子と70歳代の母親の二人暮らし。母親は要介護4で認知症がある。息子は独身。介護していた息子が、おむつ交換などを行っている最中に、言うことをきかない母親に対して蹴飛ばしたり、叩いたりした。また、息子が母親の介護をしている最中に母親が転倒し、頭部に怪我を負っていたにも関わらず、医療につなげようとしなかった。

(2) 虐待者に焦点をあてた事例分析

息子は高校卒業後、アルバイトをして生活してきた。父親に対しては小学校高学年くらいから嫌いで、あまり口を聞こうとはしなかった。父親は母親に手をあげることが時々あった。生活が苦しくなり、母親は夫と離婚。母親は無年金で収入は無く、息子が働いて収入を得なければ生活が成り立たない状況であった。家の中には、母親のために買ったという健康食品が多くあったが、医療受診はお金がかかることから積極的ではなく、息子自身で介護してお金がかからないようにする様子がみられた。しかし、行方不明になった飼い猫の搜索に大金をかけたり、天気が悪くても母親の部屋の雨戸を開けず、また、窓ガラスなどには内側からダンボールで目張りをするなど、それらの行動から息子自身の抱えている問題が背景にあると思われる。しかし、本人の過去の情報及び母子関係の情報がないため明確な分析は難しい。

事例6. 夫による妻への身体的虐待

(1) 概 要

70歳代の夫婦の二人暮らし。妻は要介護3。通所介護の送迎の際、夫が妻を平手で叩いた。時々、二人で口論していることがあり、夫が「もう帰ってくるな」と言い、妻の預金通

帳を家の2階から放り投げたこともあった。妻が夫に対して、掃除ができていないことや酒臭いこと、昔のことなどを毎日言うため、夫のストレスが高まり、叩いてしまうようである。そのことを周りにも話し、暴力のことを隠す様子はない。

（2）虐待者に焦点をあてた事例分析

妻は夫から離れたいとは思っていない。「夫を一人にできないので家に居たい」と言う。また、「叩かれても軽くだから大丈夫」と言う。夫は昔から支配的で、気に入らないとちゃぶ台をひっくり返すようなタイプである。また、世間体を気にし「妻を施設に入れたら近所から何て言われるかわからない」と言う。叩くことは当たり前であると考え、「あの女が文句を言わなければ叩かない」などの発言がある。もともとDVやアルコール問題を抱え、共依存の関係がある様子。

事例7. 長男による母親への身体的虐待と心理的虐待

（1）概 要

80歳代の母親と50歳代の長男の二人暮らし。要介護2の母親に対して、長男はその言動に腹を立て暴力を振るう。母親に「こんな時間まで何をしていた」と言われ、腹が立ち何発も蹴りを入れていた。その後もイライラして仕事に行けなくなってしまい、解雇された。母親の介護のせいであること、自分も病気なのだから仕方がないと、暴力を正当化している。また、母親のお金の使途が不明で、経済的虐待の疑いもある。

（2）虐待者に焦点をあてた事例分析

長男は、自分を犠牲にして母親の世話をし、その介護が負担で、現在も失業していると言う。それなのに、母親は自分に対して感謝が足りないし、何度注意しても同じことを繰り返し、イライラさせるので殴ったとしても仕方がないと考えている。長男が言っていることと実際の違いや、根拠のないプライドの高さが感じられる。また、お金に関する強いこだわりがある。母親から情報を得ることができないが、長男は暴力を肯定しているところや自己中心性が強いことから、暴力のある家庭で育ったことも考えられる。

事例8. 弟による兄への身体的虐待

（1）概 要

兄弟共に70歳代。兄は精神疾患があり、こだわりが強い。介護度は要支援1である。弟は未婚で就業しているが、頭がい骨骨折の既往歴があり、てんかん発作がある。二人は別々に暮らしている。弟は、兄の生活のことをずいぶん心配しているにも関わらず、兄が嘘をついたり、大事な話をしなかったりするので、その時には怒りが出で、手を挙げてしまうことがあり、これまでに3回の暴力があった。

(2) 虐待者に焦点をあてた事例分析

生真面目な弟とこだわりが強い兄という印象を受ける。弟は、兄のために金銭管理などをきちんと行いたいという義務感は強いが、自身の病気や事務処理能力などに限界を感じている。そのため、処理しきれない感情が暴力となって表出していると考えられる。また、推測ではあるが弟の脳の気質的な変化も怒りや暴力行為に関係していることも考えられる。

事例9. 長男による父親への身体的虐待

(1) 概 要

70歳代の父親と50歳代の長男の二人暮らし。父親は心身とも自立している。息子はほとんど収入がない。また、精神疾患がある。息子は、月2回ほど、飲酒した上で父親に暴力を振るう。父親は、被害届は出さないが、息子の自立を考え、どこかに避難したいと申し出ている。身体に数カ所のアザを認めた。

(2) 虐待者に焦点をあてた事例分析

父親によると、息子に対しては厳しく接してきたが、親に甘えた生活を送っており、いつまでも自立しない息子と思っている。父親はかつて大企業に勤め、仕事一筋で、一家の大黒柱であった。その一方で息子は、父親にやりたいことを否定されてきたようである。息子は父親に認めてもらいたいという気持ちがあるのではないかと。また、息子は「俺が酒を飲むのは父親のせいだ」「説明できない不安や怒りから父親に手をあげた」と話す。「ちゃんと仕事をしろ」という父親に対して期待に応えられない不安があるのではないかと。この事例では、父親が被害者であるという見方だけでよいのだろうか。逆の視点も必要ではないかと。それは、まず「訴えてきた人の持つ問題はないか」という視点。そして、それは家族をシステムとして見つめる視点である。この年齢で、父が息子に自立してほしいと言うことは、その背後に自分の思うような息子になってほしいという考えがあるのではないかと。しかし、それは息子自身が考えることであろう。

IV 考 察

事例検討を行うなかで、研究当初には見えていなかった、「アセスメント局面」における支援者側の課題として、次の点が明らかになった。

課題1. 虐待者に関する情報不足

虐待者が虐待をしなければ虐待は起きない。当たり前の事だが、なぜ虐待者が虐待という行為をしたのか、それを構造化してとらえていくことは、支援の方法論へとつながる。しかし、虐待者に関する情報収集が十分になされていないことが明らかになった。

事例提供は、その事例へ対応している部署の担当者から行われたが、検討を進める中で、虐待者と被虐待高齢者の関係性を見つめ、虐待をしている養護者を理解するうえで必要な情報（例えば、家族関係の歴史、生活史、文化的背景、考え方・信念など）が不足しているため、十分な検討と分析ができないことがあった。

その原因として考えられることは、①高齢者虐待防止法では、高齢者の安全確保が最優先され、その対応に迫られ、養護者がなぜ虐待を起したのかを問うことが後回しにされてしまうこと、②支援者が虐待者にあまり積極的に関わりたくないという思いや姿勢が影響していること、③動的风险の方が、静的リスクよりも変化が期待できること。動的风险は、態度、信念、価値観、人間関係、サービス利用、地域のサポートなどの現在とこれからのこと。静的リスクは、過去の家族関係、出自、家庭などのことである。虐待者に関わっても、家族の関係性は変え難く、虐待者を変えるには時間がかかり、サービス利用や環境を変える方が早いし、関わりやすい。④虐待者へ対応することが職務範囲か否かに疑問を感じている場合もあることなどを挙げることができる。

課題2. 実践現場の関心は虐待対応方法論に向けられている

虐待者に関する情報が不足していることを、虐待防止実践の現場の視点で考えると、どう対応したらよいかといった方法論に対して強い関心があり、「なぜ」に目がいけないことが考えられる。高齢者虐待対応の現場では、高齢者虐待事例に出会うと、「こんな時はどう対応したらいいのだろうか」と考えることが多い。つまり、対応の仕方、方法に関心が寄せられる。そして、高齢者虐待防止法を根拠に、被虐待高齢者や虐待者（養護者）への対応や支援が行われる。それは、「今、ここ」において対応が求められる問題を扱う以上、必要なことは言うまでもない。

しかし、それと同時に、次のような視点を持って対応することも必要ではないだろうか。それは、「その養護者は、なぜ虐待行為をするのだろうか」「養護者にとって、虐待行為の意味は何か」という視点であり、そこに着目することである。どう対応するかというハウツー＝「方法論」ばかりを追い求めることは、発生原因に目がいかず、ひいては的を外れた支援となる危険性も大きい。

課題3. 被虐待高齢者と虐待者の関係性の捉え方

高齢者虐待対応では、今、起きている虐待を、虐待者と被虐待者の二者関係からとらえることが多い。その表面的、一面的な捉え方から、他の家族を含めた家族全体の関係性を踏まえ、かつ、今だけではなく虐待者と被虐待高齢者が出会ってから今日に至る関係性の歴史にも焦点をあて、なぜ、今虐待が起きているのかをとらえることが必要となる。暴力や虐待と

なる行為はさまざまであるが、相手を服従させ、思い通りに操ろうとする意図から用いられることが多い。権力と支配の視点で今起きている虐待現象を捉えることは可能であるが、それまでの家族関係はどうであったのか、なぜ今の関係に至ったのかなど捉えることが必要となる。そうすると、改めて被虐待高齢者はもとより、虐待者に関する詳しい情報、家族の過去から現在に至る情報が不足していることを痛感する。そのような視点で家庭内の虐待をとらえていかなければ、適切なアセスメントは難しくなるのではないだろうか。

V 今後の研究課題

高齢者虐待対応におけるアセスメント局面において、被虐待高齢者の被害状況の把握は、その対応の緊急性と関連して最優先で取り組まなければならない。まずは被虐待高齢者の命と暮らしを守ることが、虐待や暴力の問題にかかわる際に重要なことは言うまでもない。しかし、被虐待高齢者の安全確保は、虐待者への対応を除くものではなく、被虐待高齢者の安全のためにも虐待を起こしている養護者に関わる必要がある事例も多い。今回の事例収集や事例検討では、十分な情報を得られず、なぜ虐待が起こるかを判断できない事例もあった。このアセスメント局面で重要となる視点を以下に挙げ、どうすれば実践場面で活用できるか、今後の研究課題として指摘しておく。

1. 「なぜ虐待が起きたのか」を追究する視点

(1) 「原因仮説」を立てる

高齢者虐待への対応では、どう対応するかという対応方法論だけでなく要因・原因に目を向ける視点が必要となる。この視点に立って考えることで高齢者虐待発生の構図が見えてくる。そして、構図が見えてくることで支援の方向性や方法論が見えてくる。

そのためには、原因仮説を立てることが一つの方法である。虐待者は高齢者に対してなぜ虐待行為をするのか、その理由を考えることが必要となる。こんな理由ではないかと仮説を立てるには、まず虐待者の状態を「人と環境の視点」から詳しく見つめてみる必要がある。目の前にいる虐待者が示す状態像と、置かれている環境、その間で起きている現象などを、判断に必要な情報を収集し、状況を的確に理解することがアセスメント局面として重要であり、そこから原因や要因を検討していくことが可能となる。収集した情報という根拠に基づき推論し、原因や要因の仮説を立てることが優先される。

(2) 原因仮説を立てるためのアセスメントの視点

高齢者虐待の原因仮説を立てる際のアセスメントの視点として、まだ吟味の余地があるが以下の点を指摘しておきたい。

- ①表面化した虐待行為ではなく、水面下の要因（本人の特性と環境の影響など）に着目す

る。例えば、過去の親子関係（関係史）、成育に起因すること（成育史）、現在の力関係に起因することなど。②虐待者になる前に、被害者だったかもしれないことも情報をもとに考える。③虐待をしてしまう人の背景には、家族間の問題があるかもしれない。家族内における現在とこれまでの「問題」、そして、その「解決方法」の両方を把握することで、その家族がとってきた課題解決の方法を知り、それを变えることで長年問題であったことが解消していく場合もある。「問題」が問題ではなく、「解決方法」が問題（それ以外の方法を知らなかった、あるいは「偽解決」⁶⁾だった等含む）であったということも考えられる。④虐待者の権力と支配によって、被虐待高齢者を従わせようとする場合もある。どのような力により、何を支配しようとしているのだろうか。その対極には、「対等と尊重」があり、そのような関係性を構築することは可能か。⑤現在の支配状態は、過去の支配への反発という場合もあるかもしれない。⑥「こうでなければだめだ」という偏った意識やこだわりが強くある場合もある。

(3) 虐待者へのアセスメントの視点

原因仮説を立てる際に、先に述べたアセスメントの視点とは別の角度から、虐待者自身を見立てるために、以下の点の有無についても留意する必要がある。

①知的な問題、②発達的な問題（自閉症スペクトラム、ADHDなど）、③精神疾患（認知症、統合失調症など）、④人格的な問題（パーソナリティに関わる問題など）、⑤嗜癖的な問題（アルコール依存、薬物依存など）、⑥育ってきた家庭の機能の問題（AC性、暴力家庭：暴力を学んできた・受けてきた・見てきた、など）。

これらについて判断するためには、虐待者や家族に関する情報がかなり必要になる。その情報を、誰から、どのように得ていくかは事案によって異なるが、今後考えていかねばならない課題といえる。支援する側が、もともと夫婦関係や親子関係がどうかとか、虐待の原因となる事象が、それなりに理屈としてわかる場合もある。しかし、客観的に理解しがたい場合（例えば、発達的な問題などを包含している）もある。そのような情報は、虐待者と直接接するなかで得られることもたぶんにあるが、事案に応じて情報収集の方法を工夫することが求められよう。

2. 家族全体を捉える視点

表面に出た虐待問題から、家族全体を見つめていくことは、ソーシャルワーク実践のなかでも古くから導入されてきた。川村（2011：13）はソーシャルワーカーの力量を高めるための理論・アプローチとして「システム（家族療法）理論・アプローチ」を紹介している。このアプローチは、相談者が訴える内容だけでなく、相談に来た人を見ること、そして、そこから家族を見ることを大切にしている。虐待をする側、される側と分けるのではなく、「家

族というシステム」という視点から見つめる方法である。更に加えるならば、問題点が特定のメンバー、例えば虐待者にあると考えるのではなく、問題点はあくまでも家族同士の関係のなかにあると考える。暴力や虐待は、高齢者と虐待をしている家族との間の、過去から現在に至る関係性に目を向けて捉えていく必要がある。家族は相互作用のなかで生きているので、虐待する側も被害者だったかもしれないという視点でも見る必要がある事例もある。例えば、子どもの頃の親子関係が、現在、力が逆転して、虐待として現れてくることもある。家族の関係性の問題として捉えること、そして、なぜ権力と支配が起きているかを考えることが必要である。

3. 「どのように対応するのか」を追究する視点

「なぜ」の疑問には原因仮説で対応していく必要性について先に述べたが、「どのように」という対応方法に関する疑問には「方法仮説」を立てて検討していくことが必要になる。これについてはすでに実践現場で取り組まれており、多くを述べる必要はないが、状況に適合した対応方法をとることができるかは、原因仮説に対する検証が適切に行われているか否かによる。つまり、高齢者虐待の発生原因と対応方法は連動しているのであり、原因仮説と方法仮説は対にして取り組まれるべきものといえる。そして、どちらの仮説を立てていくにしても、被虐待高齢者と虐待者の傍らに寄り添って行われるアセスメントが大きな鍵を握っているのである。そのことを、事例検討を通して再確認した。

Ⅵ 謝 辞

本研究にご理解をいただき、事例をご提供いただいた専門職の皆様、事例検討にご協力を頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究はJSPS 科研費26380768の助成を受けたものです。

注

- 1) 平成18年度については、厚生労働省老健局計画課認知症・虐待防止対策推進室（2007.12）「平成18年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果（確定版）」
平成25年度については、厚生労働省老健局高齢者支援課認知症・虐待防止対策推進室（2015.2.6）「平成25年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果添付資料」(<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiouboushitaisakusuishinshitsu/0000073465.pdf>, 2015.11.6)
- 2) 高齢者虐待防止法では、「養護者」を「高齢者を現に養護する者であって養介護施設従事者等（第五項第一号の施設の業務に従事する者及び同項第二号の事業において業務に従事する者をいう。以下同じ。）以外のものをいう。」としており、本稿でも同様に扱っている。
- 3) 以下を参考にした。

Mary Joy Quinn, Susan K. Tomita (1997) Elder Abuse and Neglect, Second Edition, Causes, Diagnosis,

and Intervention Strategies, Springer Publishing Company, New York.

多々良紀夫 (1994) 『老人虐待—アメリカは老人の虐待にどう取り組んでいるか—』 筒井書房.

厚生労働省老健局高齢者支援課認知症・虐待防止対策推進室 (2015.2.6) 「平成25年度高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果添付資料」 (<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaibou-shitaisakusuishinshitsu/0000073465.pdf>, 2015. 11. 6).

4) これを「ドゥルース・モデル」という.

Ellen Pence, Michael Paymer (1993). Education Groups for Men Who Batter The Duluth Model. Springer Publishing Company, New York. p3. (=2004, 波田あい子監訳, 堀田碧・寺澤恵美子訳『暴力男性の教育プログラム ドゥルース・モデル』誠信書房, 東京, p3.)

5) 晩年の虐待に関する国家情報センター (National Clearinghouse on Abuse in Later Life) (<https://www.ncall.us/sites/ncall.us/files/resources/Abuse%20in%20Later%20Life%20Wheel%202014.pdf>, 2015. 11. 8)

6) 長谷川は「問題—偽解決循環」と呼んでいる. 長谷川啓三 (1987) 『家族内パラドックス—逆説と構成主義—』 彩古書房, p29.

文 献

川村隆彦 (2011) 『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』 中央法規出版.

日本社会福祉士会編 (2011) 『市町村・地域包括支援センター・都道府県のための養護者による高齢者虐待対応の手引き』 中央法規出版.

大淵修一監修 (2008) 『高齢者虐待対応・権利擁護実践ハンドブック』 法研.

副田あけみ編著 (2013) 『高齢者虐待にどう向き合うか—安心づくり安全探しアプローチ開発—』 瀬谷出版.

上田照子・水無瀬文子・大塩まゆみ・橋本美知子・高坂祐夫・福間和美・大西早百合・青木信夫 (1998) 「在宅要介護高齢者の虐待に関する調査研究」『日本公衆衛生雑誌』 45(5).

Uwe Flick (2007) : QUALITATIVE SOZIALFORSCHUNG, Rowohlt Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg. (=2011, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『新版質的研究入門—〈人間科学〉のための方法論』 春秋社, 東京).

Assessment of Elder Abuse Case Studies: What Causes Elder Abuse?

YAMAGUCHI, Koji

Case study meetings on elder abuse caused by caregivers were conducted to collect case examples that redefine the relationships between abusers and elderly victims from a perspective of power and control.

Nine case examples were provided by three groups. These are the challenges and findings revealed based on the review:

- (1) Lack of information about abusers;
- (2) The focus in the field leans toward how to deal with the abuse itself;
- (3) The necessity of reviewing the relationships between abusers and elderly victims in the context of family dynamics, including family histories.

Future tasks would be not only to deal with the abuse, but also to examine the reasons the abuse occurred, form causal hypotheses, and to develop specific mindset of assessing the causal facts of abuse and systematically include evaluation of family dynamics.